

4. 発達しょうがい学生に対する対応事例

〈授業前後の配慮〉

①イメージをつかみやすい視覚的教材（レジュメ）を作成する
言葉の説明では、頭にイメージ像が思い浮かばずに理解できないことがあるため、写真や絵など、見てニュアンスやイメージが伝わりやすい教材を用意した。
②学習支援の時間を設ける
抽象的な概念や、複雑な表現が理解できないことがある。授業時間内で理解できなかった部分は噛み砕いて説明するなど、本人の希望に応じて個別に時間を設けた。
③課題・レポート内容を確認する
こだわりの強さから、完成度を求めるあまり、どのくらいの完成度でレポートを提出しよいかのかが分からなくなってしまう、中には提出できなくなってしまう学生もいる。そのため、提出できる質になっているか、学生と一緒に確認した。

～個別対応事例～

〈学生の様子〉

- ・対人コミュニケーションがスムーズにとれず、ときに独り言を発することもある。
- ・耳から得た情報処理はやや苦手で、理解不足や失念することもある。書字なども不器用。
- ・90分間集中力を持続できず、注意力・集中力を欠く行動をとる場合もある。

〈授業中の配慮〉

◆質問の返答がない場合は、再度別の言い方で尋ねる

耳からの情報処理が苦手なため、学生の反応が薄い場合には言い方を変えて質問した。

◆情緒不安定などにより対応に困った場合は、しょうがい学生支援室等に連絡する

授業中に落ち着きのない行動をとったり、寝てしまい全く起きなかったりしたときに、しょうがい学生支援室や、学生部/新座学生課へ連絡して一緒に対応をお願いした。

◆本人の了承を得たうえで、他の履修者へ当該学生の行動特性を伝える

グループワークの多い科目において、本人からクラスの他の学生に自分のことを伝えてほしいという要望があったため、行動特性などを全員に伝えた。

〈授業中の配慮〉

①実習・演習では、必要に応じて、教員またはTAがアドバイスをする

話を聞いて理解するのが難しい場合、作業に取り組んだり体を動かしたりする場面になるとつまずくことがある。様子を見て難しそうなら、その都度アドバイスをした。または、実際に見本をやって示した。

②レコーダーで講義を録音することを認める

耳からの情報処理が苦手なため、繰り返し聞いて理解できるよう、レコーダーの使用を認めた。



③座席を配慮し、授業中の離席を認める

授業中の離席があるようだったので、出入り口の近くに座席を確保した。聴覚過敏があり、雑音によって気分が悪くなってしまう学生もいるため、教室を出て少し（5分程度）休憩することを認めた。

④わかりやすい話し方を意識する

話題が急に変わると理解することが難しくなるため、話題の変わり目で、「〇〇の説明をします」「〇〇について話します」と題名をつけるようにした。

⑤意見交換では、必要に応じて仲介する

コミュニケーションが苦手なため、伝えたいことが伝えられない様子が見えたら、仲介をした。

⑥課題内容を具体的に示したり、文字にして伝える

漠然としたテーマでは、取り組めない場合がある。例えば、「〇〇について考えを示せ」では、何を考えてよいか分からないとの学生からの相談を受け、「〇〇と△△の違いについて説明せよ」と課題の内容を具体的に示した（場合によっては課題内容を変更した）。耳から得た情報処理が苦手な学生に対しては、文字にして伝達した。媒体はプリントやメールなど、方法は学生と相談して決めた。